The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	香港における華人慈善団体の現在 : 人類学と歴史学の協同へ向けて
Author(s)	芹澤, 知広
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 141-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11003
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

香港における華人慈善団体の現在

―人類学と歴史学の協同へ向けて―

芹澤　知広

〈要旨〉

近年、中国社会（華人社会）についての内外の歴史研究においては、「善堂」と称される伝統的な慈善団体をはじめとした中国社会の慈善活動に注目した研究が盛んに行われている。本論では、そうした現代的な研究と問題意識や対象を共有しながら、人類学からのアプローチを試みる。具体的には、今日の香港における華人慈善団体を、それを取り巻く社会的・文化的状況を明らかにしながら、歴史に配慮して記述する。

今日の香港においては、「善堂」の伝統を継承し、運営やサービスの点で西洋起源の慈善団体とは区別できる特徴を持った中国人の慈善団体が存在する。その中でも、特に、ここで扱う六つの団体は、大規模で威信も高く、近年は互いに連係を強めている。また香港の住民は、施設や募金活動を通じて、これらの団体と関係を持っている。一方、伝統的なサービスに加えて、社会の需要に合わせた新しいサービスを充実させながら華人慈善団体が発展して行く上では、政府との関係が重要である。そして、この政府との交渉の過程において、その再編成や「伝統」の変化が起こることがある。しかし、歴史を通じて香港の住民に対する華人慈善団体の重要性は変わらず、それを取り巻く社会現象は、人類学と歴史学の双方にとって興味深い研究材料を提供し続けている。

キーワード

人類学、歴史学、慈善団体、華人社会、香港

一、「善堂」の歴史と現在

最近、日本のある歴史家は、エッセイの中で中国の社会救済事業について触れている。[1] 一九九四年の夏に広東省汕頭市を旅行した時に見かけた「誠心善堂」という社会救済施設をきっかけに、前近代の中国社会において、こうした社会事業は、今、目の前にある「誠心善堂」を取り巻くスラムの住人のような庶民が、日常生活を脱し移住しようと欲するのを抑止する機能を持っていたのではないか、と考えを巡らせている。ここでの思考の動きは、もちろん宋代の専門家らしく、前近代へと時間を遡っていくものであるが、こうした社会救済事業を対象にした歴史研究について、「この問題も近年、研究が深まりつつあるが、華僑の広がった一帯までの追跡調査となると未だしの感がある」[2]として、華僑社会にも言及しているのは興味深い。

モーリス・フリードマンによるシンガポールや香港での調査研究からも窺うことができるとおり、現在から遠い歴史に繋がる研究対象を、中国国外の中国人コミュニティにおいて追究するという思考の動きは、むしろ人類学による中国研究に特徴的なものであった。[3] 一九八〇年代以降、対外開放の恩恵を受けて人類学者たちが中国本土でのフィールドワークを始めた時期に、歴史学者たちは、すでに時間・空間を越え、現地調査も含めた幅の広い歴史研究を開始していた。特に現在の中国社会史研究において、その方法や対象は、人類学にかなり接近していると言ってよい。[4]

一九七九年に出版された可児弘明著『近代中国の苦力と「豬花」』は、華僑社会にまで広がる中国人の民間社会救済施設（「善堂」）のあいだのネットワークを扱い、香港の「保良局」が、一九世紀末から今世紀初頭にかけて行った婦女救済事業を中心に研究した歴史学の傑作である。[5] この研究は、香港に限らず、中国人社会の慈善団体というテーマを扱った先駆のひとつと位置づけることができるが、そこで説明される「善堂」の事業の分類に拠りながら、今世紀初頭の中国で行われていた慈善事業を次に簡単にまとめてみることにしよう。[6]

（一）社会教化、あるいは固有文化の擁護運動（「義學」＝無料学校など）
（二）助葬事業（「施棺」など）
（三）医療事業（「施藥」など）
（四）社会的弱者（老人、未亡人など）の生活保護
（五）社会的弱者の収容
（六）救貧事業ならびに飢饉救済（「施粥」など）
（七）公共施設（道路の補修など）
（八）その他（災害地救済募金など）

これらの慈善事業は、今日の香港の慈善団体で行われている慈善活動にかなりの部分共通している。詳しくは後述するが、現在にお

いても積極的に活動を行っている香港の「保良局」は、一八七八年に設立され、またその創設時の母体となった「東華醫院」は一八七〇年に組織されている。夫馬進の研究によれば、この二〇世紀初頭の「善堂」に繋がる民間慈善組織が始まったのは明末清初（一七世紀の初めごろ）の時期で、その後の普及状況をみると、広東省では多くの「善堂」が設立されているが、それは同治年間（一八六二―一八七四年）以降のことで、江蘇省や浙江省などと比べて新しい時期であったことがわかっている。[7]

こうした善堂の普及も踏まえて、近年の欧米の歴史学界では、中国の近代都市における自治の問題を扱った市民社会論が盛んに行われている。[8]また一方、最近の日本の歴史学界においても、可児弘明や夫馬進の研究に続く、中国人社会における慈善をテーマとした新しい研究が出てきている。[9]本論の目的は、これら内外の中国社会についての現代的な歴史学研究と、問題意識や対象を共有しながら、人類学の側からのアプローチを試みることにある。具体的な作業としては、いわゆる「残された中国」（モーリス・フリードマン）として人類学が注目してきた香港に対象を求め、そこで「善堂」の流れを汲んで現在活動を行っている華人慈善団体と、それを取り巻く社会的・文化的な状況を明らかにしながら、現在から過去へと視線を繋げて行くことにしたい。[10]

二、「華人醫院」をめぐる人類学と歴史学

前節でも触れた香港の「東華醫院」は、香港の過去と現在を通じて、最も威信の高い慈善団体である「東華三院」の中核を成している病院である。この病院の理事会のメンバーになることで、中国人社会の商業エリートが植民地の政治に参画できる可能性が開かれていた点など、香港社会に対して少なからぬ貢献をしてきたことから、香港社会研究において、この団体は今までも何度か論じられてきた。[11]その中でも特に、一九八九年になって出版されたエリザベス・シン著『権力と慈善』は、英語と中国語の史料に基づく、「東華醫院」の初めての歴史学的モノグラフであり、中国人社会における慈善団体の研究としても非常に重要な著作である。[12]このモノグラフの中で、エリザベス・シンは、人類学者ローレンス・クリスマンの華僑社会論に触れて、「東華医院」が、"Chinese hospital"（「華人醫院」）という名のもとで多くの慈善的なサービスが行われる、華人社会における新しいタイプのヴォランタリー・アソシエーションの原型になったのではないか、という問題提起をしている。[13]人類学と歴史学の協同を目指す私たちにとって、現在の香港の事例に入る前に、この人類学者と歴史学者のあいだの議論を検討しておくことは有益であろう。

ローレンス・クリスマンは、東南アジアと北米の華人社会に適用可能な、組織化についての一般モデルを提案している。[14]クリスマン

のモデルは、いくつかの英文のモノグラフだけを資料に使い、時間という要素を考慮しない大胆な整理によるものであるが、華僑社会の一般像を得るのに示唆的な指摘が多い。例えば、華人社会の分節化とハイアラーキーの結びつきを論じた次の一節は、ヴォランタリー・アソシエーションにどのように所属しているのかということに端的に表われる、状況的、重層的な華人の社会的アイデンティティの構成のあり方をよく反映していると思われる。

「〔華人社会の〕分節、あるいはサブ・コミュニティを代表する組織は、通常、それらが含まれる、より大きなコミュニティを扱う組織の法人会員になっている。このことによって、分節的な社会構造に平行した組織的なハイアラーキーがもたらされる。そこに含まれる小さなコミュニティの成員は、より大きな組織においては、彼らが所属する小規模の組織のリーダーたちによって代表されており、普通、そのリーダーのうちの何人かは、その大規模の組織の役員にもなっている。」[15]

このハイアラーキーの上位に位置する組織が、「華人醫院」である。クリスマンは、広東、海南、客家、福建、潮州という大きな言語集団や、全華人社会に該当するコミュニティを扱う組織として、病院の理事会、学校の理事会、そして商会を挙げており、これらの組織が、医療、教育、商業に関わる通常の職務の他に、政府が公式には行わない公益事業を請け負ったり、地元や中国の災害救済などのための寄付をしたりすることを指摘している。また同じところで、学校の理事会は通常、言語集団に限られるとし、ニューヨーク、プノンペン、バンコクの事例に拠りながら、おおまかに、秘密結社から、慈善団体（「華人醫院」）、そして中華総商会へ、という全華人社会規模の組織の歴史的な変化も示唆している。[16]

これに対し、エリザベス・シンは、コミュニティのリーダーシップを執る組織としての病院の理事会について、クリスマンはその起源を跡づけることはしなかったとして、各地の華人社会の歴史的な傍証を挙げながら、その起源を「東華醫院」に求めている。シンによれば、清末（一九世紀末から今世紀初め）の中国では、病人の看護をする病院という施設は、新奇なものであった。「東華醫院」の始まりには、当時の香港に中国人の患者を中国医学で処置する「華人醫院」がなかったということに由来する、植民地政府にとってのスキャンダルが関係していた。[17]つまり、最初の「華人醫院」である「東華醫院」は、西洋の容器に中国的な内容が盛られたものであったが、その後、中国本土や海外の華人社会に同種の施設が設立され、医療の他にも社会的・慈善的活動が行われるようになっていくのである。[18]

シンが言うように、この起源の問題は、さらなる探求を進める価値がある。しかしながら、ここでは歴史的な探求を続けるのではなく、次節以下に行う現代の香港についての議論に繋げるかたちで、クリスマンとシンの議論にコメントをして問題提起をすることにしたい。まずクリスマンの議論だが、歴史を無視し、少ない民族誌的

な事実を帰納法的に整理するという方法を採っており、事例とその説明が少ないために説得力を欠いている。特に気になるのは、華人コミュニティの問題を、ヴォランタリー・アソシエーションの機能的な説明をすることで、組織の問題としてのみ論じているという点である。議論の中では、コミュニティの成員とリーダーたちとの関係、そして慈善団体を含めたヴォランタリー・アソシエーションをめぐる社会生活が詳しく扱われていないため、コミュニティについての問題が単なる行政組織の問題になってしまっている。一方、シンの議論は、クリスマンの方法論への批判を含んでいる。つまり、起源の探求も含めた歴史的な説明をする必要があるという問題提起である。仮に華人社会をその行政組織の問題として論じようとするのであれば、植民地や国家の政治という枠組みで言及できるような現地社会の歴史的な過程を無視することはできない。ところが、シンの議論にも気になるところがある。「東華醫院」の設立という出来事を、イギリス植民地政府と中国人コミュニティのあいだの意味深い価値の対立を軸にして詳述しているのにもかかわらず、「華人醫院」の歴史的な普及について述べる段では、個々の華人社会の歴史的なコンテクストの個別性には注意が払われていないように思われる。さらには、「華人醫院」の出現を強調することに重きが置かれているためか、「善堂」一般についての議論はほとんどと言っていいほどない。つまり、それ以前からも発展していた中国の社会救済組織の歴史的な流れの中で、どのようにして“Chinese hospital”という中国人のための病院が、今までの施設に替わって普及していくようになったのかという問題や、なぜ医療機関である病院が、前節でまとめて挙げたような極めて多様な慈善事業を行っているのか、という問題が課題のまま残されるのである。[19]

三、香港における「慈善機構」

先に述べた「善堂」や「華人醫院」の議論を踏まえ、現在の香港を見る場合、まず、この特定社会において慈善団体とはどういうものなのか、という点から議論を始めるのは自然なことであろう。香港では、「非牟利慈善機構」(non-profitable charitable organization)ということばがよく使われているが、これに該当するのは、概ね、税務署に届け出て、政府から免税措置を受けている非営利の組織である。「香港税務局」が配布している、免税を規定した諸条例を説明したパンフレットに基づいて、「慈善機構」の定義を見てみることにしよう。[20] 免税を規定している諸条例には「慈善」(charitable)の定義がないので、「香港税務局」では便宜上イギリス法の判例に基づく規準を適用している。そこには、次の四つが含まれる。[21]

(一) 貧困の救済
(二) 教育の促進
(三) 宗教の促進
(四) その他、社会にとって有益な慈善的性質を持つ諸目的

ここで問題になるのは第四項で、このパンフレットでは、どういう項目が法廷で「慈善性質機構」として認められたか、ということの例を参考として挙げている。その例のうちのいくつかをここで挙げると、学会などの学術交流、動物虐待の防止、節制と菜食の奨励、視覚障害者に対する福祉、などがある。[22] 慈善活動の内容は、これほど多様であり、もし日本においてであれば、宗教法人と学校法人に分けて措置を受けるような団体も、まとめて「非牟利慈善機構」のリストに載ることになる。そのため、政府の規定から、いわゆる慈善団体だけを抽出するのは難しい。

しかし、いわゆる慈善団体が加入している上部組織のようなものは存在する。略して「社聯」と言われている「香港社會服務聯會」(The Hong Kong Council of Social Service) である。これは、一九三七年につくられた「緊急救濟聯會」(The Committee of Voluntary Emergency Relief Council) を前身とし、第二次世界大戦勃発以降に急増した香港への難民を救済する業務を行っている各ヴォランタリー・アソシエーション間の協力や連絡を進め、提供するサービスが重複しないよう調整することを目的として一九四七年に設立された。[23] 一九九四年五月三一日現在の会員団体の数は、二一八で、「東華三院」や「保良局」を初め、主な慈善団体は会員として加入している。[24]

また、この「社聯」から、一九六八年に生まれた「香港公益金」(The Community Chest of Hong Kong) も、多くの会員団体を擁する、今日の香港において重要な位置を占める慈善団体である。「香港公益金」の歴史は、民間の中央組織としての「社聯」が、各会員団体の財政状態を改善するために、各団体の募金活動を統合しようというアイデアを出し、そのための調査委員会を一九六五年に設置したことに始まる。[25] その目的が募金活動の統合にあるため、「香港公益金」自体は、慈善的なサービスを提供していないが、様々な募金活動を行い、そこで集めた基金を、社会活動を行っている様々な会員団体に割り振るということを主な業務としている。一九九四―九五年度には、会員団体は一三七を数え、「社聯」もその中のひとつとして資金の配給を受けている。[26]

しかしながら、「東華三院」や「保良局」は「香港公益金」の会員団体にはなっていない。この点について、インタビューの中で「香港公益金」のある上級行政職員は、「『東華三院』は、大き過ぎるし、しかもそれ自身の伝統がある。六〇年代に『香港公益金』が始まってまだ小規模だった時にも、すでに大規模な慈善団体だったし、それは『保良局』も同じである。」という説明をしていた。資金の点から言うと、必要額の大小とは別の違いも存在する。「香港公益金」の会員団体の多くは、資金調達に苦労している小規模の慈善団体であり、会員団体になることで募金活動を専ら「香港公益金」の管理下に置いているのに対し、「東華三院」や「保良局」は、独自に募金活動を行い、また「總理制」と一般に呼ばれる運営方法を取っている。

「總理制」とは、毎年替わる総理から成る理事会を設け、そこで

の募金活動を中心に運営していく方式で、一年間総理を務めるには一定額の寄付をしなければならないため、年間予算のうちの一定額は予め、あてにできることになる。総理になるには、関係者の紹介が必要であり、過去の例には、中国系の人に嫁いだ日本人女性や香港で仕事をしている海外華人が含まれてはいるが、総理のほとんどはいわゆる中国人である。[27]「總理制」を採用している慈善団体は、他の多くの側面においても中国文化の色彩が濃厚である。例えば「東華三院」では、現在、理事会である「董事局」への助言をする機関である「顧問局」の主席に、かつての「華民政務司」（Secretary for Chinese Affairs）にあたる「政務司」（Secretary for Home Affairs）がなっており、毎年春に行われる新しい理事会の就任式では、「神農」像の前で、「政務司」と並んで総理たちが宣誓をする。[28]

本論において「華人慈善団体」という言葉は、こうした「總理制」を採り、中国人（華人）によって運営されている慈善団体を指している。そして、これらの団体は、運営の方法や提供するサービスにおいて「善堂」の伝統を引き継いでおり、西洋起源の慈善団体とは区別できる特徴を持っていると想定できる。[29]

四、「六大慈善團體」の現在

実のところ、今日の香港において「善堂」ということばが、華人慈善団体を指して使われることは稀であり、「慈善機構」という一般的なことばがよく使われる。一方、華人慈善団体自体の印刷物などでは、それを指して「善團」ということばが使われていることがあるが、これは「慈善團體」の略である。なお、「華人醫院」ということばも実際には使われていない。現在、病院それ自体について中国人と西洋人の区別はなく、例えば「東華三院」の医療機関である「東華醫院」、「東華東院」、「廣華醫院」、「馮高敬療養院」（一九九四年七月に「東華三院馮高敬醫院」と改称）、「黄大仙醫院」、は、他の三二の病院とともに「公立醫院」（Public Hospital）として、一九九〇年一二月に成立した「醫院管理局」（Hospital Authority）という上部組織の管轄下に入っている。[30]

しかしながら今日、香港の六つの大きな華人慈善団体が関係を強めるようになってきている。それ以前は、「東保一家」と言われる「東華三院」と「保良局」の歴史的な結びつきがあったが、それを越えるような香港全体をカバーする華人慈善団体の連帯はなかった。一九九二年になって、「東華三院」、「保良局」、「樂善堂」、「博愛醫院」、「仁濟醫院」、「仁愛堂」が、そのつながりを強化するために合同の晩餐会を開催し、それ以降、毎年一度、この集まりを持つようになっている。[31]

これら六つの慈善団体が、今日の香港において威信が高いことを窺える例を挙げてみよう。香港に住む潮州系の人々の同郷団体のうちの上位組織にあたる「潮州商會」では、毎年、香港の慈善団体の要職に就いた潮州人同胞を、「潮州會館」に招いて祝賀の宴を設けている。一九九三年に招かれて参加したのは、「樂善堂」を除く、前記の五つの慈善団体の理事会に参加している一七人で、「潮州商

會」の会長の挨拶では、これらの慈善団体は「香港各大重要的慈善團體」と表現されていた。[32]

ここで、これら六つの大きな華人慈善団体の起源と現在について簡単に紹介することにしたい。

（一）東華三院

「東華三院」という名称は、一九三一年に、「東華醫院」、「東華東院」、「廣華醫院」の経営が統一されてからのものである。前にも述べた通り、その中心にある「東華醫院」は、一八七〇年に始まり、病院の落成は一八七二年である。場所は、当時の香港島の中国人街にあたる「上環」（Sheung Wan）で、当時提供していた医療は専ら中国医学であった。この他、初期には、身寄りのない婦人・老人・身体障害者の収容、難民の援助及び郷里への返還、香港及び中国各地の被災者への衣類や食糧の給付、「施棺」、といった慈善事業を行っていた。

特筆すべきは学校経営で、早くも創設の一〇年後に「文武廟義學」を開設している。当時、香港の中国人社会において中心的な寺廟であった「文武廟」の脇に、中国人のための学校があり、香港の中国人社会のリーダーたちが近隣の人々（「街坊」）と共にその学校を経営していた。一方、「東華醫院」の創設時の理事会主席である梁雲漢（梁安）は、自身も富裕の出ではなく、庶民の教育に熱心で、無料の学校をつくりたいと考えた。彼の尽力により、その学校を「東華醫院」の管轄に移し、「文武廟」の収益で学費を賄うことになり、一八八〇年になって生徒を募集している。その後、東華三院の「義學」は増えるが、「文武廟」を始め「東華三院」で管理する寺廟の財産に頼るという経営は、一九五三年になって教育関係の政府機関が全面補助を行うまで続いた。[33]

現在「東華三院」が所有する施設を紹介することにする。医療・衛生サービスの施設として、病院が五、医療センターが二、中国医学の診療所が二、教育サービスとして、「中學」（日本の中学と高校にあたる）が一五（一つは建設中）、英語学校が一、小学校が一二、幼稚園が一一、特殊学校が三、専門学校が一、コミュニティ・サービスとして、老人ホームが一八、老人センターが六、老人昼間看護センターが二、リハビリテーション・センターが四、青少年センターが九、託児所が一四、養護施設が七、葬儀場が三、寺廟及び占いをする場所が一二、位牌安置所が一、文物館が一、である。[34]

興味深いのは、コミュニティ・サービスのひとつとして、「中国的な風俗習慣への需要に合わせて、一貫して伝統的なサービスを重視してきた」[35]ということである。施設の一覧には挙げられていないが、中国の郷里への返還・埋葬など、将来に安置するために一時的に保管している一一四体の霊柩、一五四体の遺骨、一四体の骨灰が、現在も「東華義莊」にはあり、さらにその隣には、近年の火葬に合わせた納骨所が建てられて分譲されている。そのスペースは、今まで二つの納骨所で合わせて五千個以上が売られ、現在は三つ目の納骨所の建設が計画されている。また「文武廟」の脇には、位牌を置く「善德宮」が一九九三年に新しくつくられ、その中のスペースも

売り出されている。そして、「施棺」を行って葬るための共同墓地（「義塚」）も四つある。これら伝統的なサービスから生じる利益は、他の慈善サービスへも回されている。[36]

（二）保良局

香港では、「東華醫院」が設立された一八七〇年代以降、女性や児童を誘拐して売る、人さらいが増加してしていた。政府は、人さらいを捕まえた後、保護された者を「東華醫院」に預け、「東華醫院」ではその者を中国の郷里に送り返すということを行っていた。その後、このサービスの提供も増えるにつれ、独立した機構を設けようとする動きがあり、一八七八年に当時の「東華醫院」の理事のうちの二人が中心になって「保良公局」がつくられた。これが「保良局」の始まりで、身寄りのない婦女子を収容するサービスも「東華醫院」から引き継ぎ、一八九六年に「保良公局」の建物ができるまでは、「東華醫院」の建物を使っていた。[37]

この婦女子の保護という伝統から、「保良局」は、今日でも教育を中心にしたサービスを提供している。現在の施設であるが、福祉サービスとして、養護施設が一四、託児所が二五、リハビリテーションのための工場が四、リハビリテーションのための宿舎が三、リハビリテーション・センターが二、老人センターが二、老人看護センターが二、老人ホームが二、そして教育サービスとして、予備校（「預科書院」）が一、「中學」が九、夜間学校が二、小学校が一三、幼稚園が一七、特殊学校が四、ある。[38]

（三）樂善堂

中国と英国のあいだの複雑な歴史を背負った「九龍城砦」が取り壊され、公園として整備された現在も、「樂善堂」は旧「九龍城砦」の近くにあって、この地区に根づいた慈善団体として活動を行っている。この団体の前身となる組織が活動を始めたのは、一八四三年に溯る。この年、「九龍附城四約」など九龍半島のいくつかの村落連合の郷紳が集まって組織をつくり、無料の医療サービスを行うとともに、地域の問題を討議し、住民の紛争解決を行うことが始まった。当時、この地に市場があり、ここで売られる品物は、持って来られた時に秤に掛けられ（こうした市場の秤を「公秤」と言う）、秤の使用料を徴収されていたが、この使用料の収益が、慈善活動に回されていた。その後、一八八〇年に至り、祠堂のかたちをした建物を新たに建てて正式に「樂善堂」と名乗り、医療以外にも慈善活動を行っていくようになった。[39]

現在の施設を見てみることにする。学校は、「中學」（夜間のものも含める）が八、小学校が七（午前の部と午後の部をひとつに数える）、幼稚園が四ある。医療機関としては、診療所が三、物理治療所が一ある。そのうち、「樂善堂」の事務所が入っている建物にある「樂善堂醫療所」は、西洋医学の医者の他、中国医学の医者や歯科医も擁している。また、この建物には、一九七〇年代から「香港戒毒會」と共同で「戒毒登記處」が開設されており、麻薬中毒患者の更生にも貢献している。その他の施設としては、老人ホームと老

人センターが二つずつある。また現在も「施棺」のサービスを行っているが、一九九四年度は一件だけであった。[40]

(四) 博愛醫院

「博愛醫院」は、「元朗」(Yuen Long)という「新界」(New Territories)西部の伝統的なマーケットタウンから生まれた。一九一九年の設立当時、「元朗」の住民たちは診察を請う医者がなくて苦労をしていたため、地元の郷紳が中心になり、香港都市部などの外部の商人たちも出資して、現在ある場所に病院が建てられた。また同時に、「元朗」の市場の中にも建物を買って分院がつくられた。そして翌年から、無料の診察、薬の給付、患者の入院、「施棺」などの慈善活動が始まった。[41]

その後は、医療サービスを中心に、主に「元朗」を舞台にして活動を続けてきたが、一九八〇年代以降、教育機関にも力を入れ、九〇年代からは、社会福祉施設の建設、そして「新界」を越える香港全域へのサービス提供、という大きな発展を遂げている。現在、医療施設は、中国医学の診療所などを含めて四、教育施設は、「中學」が三、小学校が二、幼稚園が一、社会福祉施設は、看護老人ホームが一、老人昼間看護センターが一、老人娯楽センターが三、社会福祉センターが一、託児センターが三、独身者用のホステルが一、さらには近年の香港の家庭問題に由来する需要に対応して、主に片親の子供を放課後に預かるための施設が一九を数える。[42]

(五) 仁濟醫院

戦後、「荃灣」(Tsuen Wan)が、「新界」の農村から工場を擁するニュータウンへと変貌しつつあった一九六一年、自身もその開発に携わっていた遠東銀行・遠東機構主席邱徳根は、人口増加に対応できない「荃灣」の医療機関の不足を憂いで病院建設の案を出した。翌年、政府の支持を得て、病院建設の基金を集めるための理事会が邱を主席にして組織され、物価の上昇などの困難を乗り越えて、一〇年後の一九七三年、「仁濟醫院」はオープンした。当時の理事会のメンバーの多くは、邱のような戦後に「荃灣」に拠点を持った上海人商人と「荃灣」の原住民有力者が占めている。[43]

その後、医療以外のサービスは、「荃灣」を中心に、付近の地区へと拡大していき、一九九〇年代には香港島や「九龍」にも施設がつくられるようになってきた。現在ある施設は、医療サービスについては、病院が一、看護士学校が一、歯科診療所が一、社会サービスとして、幼児センターが九、老人ホームが三、老人センターが五、看護老人ホームが二、老人昼間看護センターが一、リハビリテーション訓練チームが一、青少年センターが一、養護施設が四、コミュニティ・ホールが三、教育サービスとして、「中學」が三、小学校が四ある。[44]

(六) 仁愛堂

「仁愛堂」の初期の歴史は詳しくわかっていない。本来は「新界」の「屯門」(Tuen Mun)の郷村地区における伝統的な福利組織で

あり、六〇年前から無料の医療サービスや貧者・被災者の救済を行っていたとされている。この組織が重要性を持つようになったのは、一九七〇年代から八〇年代にかけての「屯門」のニュータウン化で、その需要に合わせて、一九七七年に正式に「非牟利慈善團體」として政府に登録し、「匡老扶幼、興學育才」を主旨にして多様なサービスを提供するための施設の拡充を進めることになった。[45]

現在、「仁愛堂」が持つ施設は、老人センターが四、老人ホームが一、コミュニティ・センターが二、青少年センターが二、託児所が四、「中學」が二、小学校が一、幼稚園が三、医療センターが一、診療所が一、歯科診療所が一、身体障害者や問題家庭の家事を手伝うためのセンターが一、体育センターが二、プールが一、である。これらの施設は、いずれも新界にあり、多くは「屯門」地区である。[46]

五、華人慈善団体と人々のあいだ、そしてその彼方

前節で見たように、香港では今日、大きな華人慈善団体が多くの施設を持ち、様々なサービスを全香港規模で提供している。香港に住む人々は、これらの施設を通じて、日常、華人慈善団体のサービスを受けることができる。しかしながら、慈善とのつながりは、人々が単に受け手になるということではない。彼らはまた、与え手の側に連なることもできる。例えば、普通の市民が、慈善団体へ少額の寄付をしようと思い立ったなら、ほぼ毎週土曜日、各団体が入れ替わり行っている「賣旗」という街頭募金の折りにもすることができる。また、「六大慈善團體」のうち「樂善堂」を除く五つの団体は、年に一度行う募金運動のための大型テレビ番組も持っている。人々は、慈善団体の施設を直接に通さずとも、街頭や電波を通じて、これらの慈善団体について知り、接触を図ることができる。

今日の香港では、慈善に関する募金活動が非常に多い。街頭で募金箱を置き、道行く人からお金を集めている場面をよく見かけるが、問題になるのは寄付の行き先である。街頭でよく売られている香港の中国語週刊誌では、しばしば、慈善事業を通じて香港から中国へ送られている寄付金の行き先が不明瞭であることが話題になる。このことについて香港の住民が重大な問題だと考えるのは、自分のした寄付が本当に慈善に使われているのかということである。ところが一方で、一般の人々の多くは、自分が寄付をした慈善団体が、具体的にどういうサービスや施設にその寄付金を使うのかということにはあまり関心を払っていない。なぜ大きな団体に寄付をする方を好むのかという点について、多くの人が説明するところでは、大きな団体は信用ができるということがある。例えば、「東華三院」は、いくつも病院や学校を持っているのを自分の目で確かめることができるので、「東華三院」は明らかに慈善事業を行っている、という説明である。しかし付け加えておくと、サービスを受けることと、寄付をすることが全く結びついていないという訳ではない。例えば、あるインフォーマントは、もし一〇〇ドル分無料の診察をしてもらったら、この次にその病院に寄付をする機会があれば、一〇ドルく

らいを寄付する、という説明をしていた。

前節に挙げた慈善団体の提供するサービスの細部を注視すると、伝統的なサービスを引き続き行っていると同時に、社会の需要に合わせて新しいサービスも提供していることがわかる。そして、この新しいサービスの開拓には、一般の寄付の与え手よりはむしろ、慈善団体、さらには政府機関が重要な役割を負っていると考えることができる。大きな華人慈善団体は、「教育署」や「社會福利署」などの関連する政府機関との関係が深く、毎年の施設設立の新計画に関しては、これら政府機関の方から慈善団体へ、その計画に乗るかどうかについての打診が来る。[47]

さらには、この華人慈善団体と政府の交渉の過程を通じて、その慈善団体の「伝統」自体が強調されたり、変質したりすることもある。歴史を振り返れば、「東華醫院」の設立も、この例にあてはまるだろう。一方、現代的な例として興味深いのは、「仁愛堂」である。「仁愛堂」は、本来は「贈醫施藥」を行う医療に重きを置いた慈善団体であった。しかし、一九七七年以降、政府のニュータウン開発計画に同調して発展していく過程では、「匡老扶幼、興學育才」という主旨を新たに掲げて、医療以外のサービスを提供していくことになった。現在、傘下の施設として医療センターを数に含めているが、これは、一九八一年に「仁愛堂」が四百万ドルの基金を集め、それを政府に寄付して建てられたもので、そのため「仁愛堂分科醫療中心」という名がつけられてはいるが、現実には政府が所有・管理している施設である。[48]このことは、「仁濟醫院」と同じく、戦後のニュータウンに生まれた「善堂」が、「仁濟醫院」と違って、「華人醫院」というかたちを取らなかったという例としても注目に値するであろう。

歴史を通じて、華人慈善団体は、全体としても個別の団体としても、様々な再編成の過程を経てきたと言える。しかし今日の香港において、住民に対する慈善的なサービスの提供という、その重要性は変わっておらず、人々もそのことを十分に認識している。

六、ある歴史の人類学

第二節で見たローレンス・クリスマンとエリザベス・シンの議論から抽出して、便宜上、人類学と歴史学の方法を単純に一般化して対比してみると、人類学は現在の社会の個々の事例を寄せ集めることから一般像を描こうとし、歴史学は一般的な歴史の流れの中で重要性を持っている個別的な出来事を描こうとする傾向があると思われる。それに対して、本論で試みたことは、現在の社会の個々の事例を歴史に配慮しながら描き、それに基づいて一般的な歴史へと視線を戻していこうとするものであった。

前節の終わりに触れた「屯門」というニュータウンの現代社会史におけるエピソードは、それ自体は取るに足らないような事柄であるが、他の事例と重ね合わせ、歴史を溯っていくことで、少なくとも、慈善団体をめぐって行われてきた政治的な過程に注目する歴史学的研究や、現在に生きる人々が慈善団体の「歴史」をどのように

利用し、その「伝統」がどのように変化していくのかという点に着目する人類学的研究にとって、興味深いものとなるはずである。

ところで、本論を閉じる前に、その材料自体にも大きなコンテクストを与えなければならないであろう。インフォーマル及びフォーマルに行ったインタビューに加えて、特に本論の材料として多用したのは、慈善団体の印刷物である。その中でも、一般に「年報」(Annual Report)と言われる年間の活動報告書を用いた。華人慈善団体の「年報」は、近年、年次報告と新しい理事会の就任記念式のパンフレットとが一冊にまとめられた、A4版で多色刷の厚い本としてつくられることが多く、それを就任記念式当日に配布したり、関係する政府機関に提出したりする。内容は、関係ある政府高官の祝辞、理事会の総理の略歴・紹介、前年度の活動・会計報告などであり、特に総理や各方面から前年度どのくらい寄付が来たかということについては、名前や金額を含め詳しく載せられている。

政府や関係者に活動や会計を明らかにして「信を問う」、という「年報」の本質は、清代以降に「善堂」で作成され配布されていた「徴信録」に通じるところがある。実際、今日の香港の華人慈善団体の年報においても「徴信録」という言葉が使われていることがある。そして、夫馬進によれば、この「徴信録」の作成は、近代中国における公開を前提とする公共性(パブリック)の論理に基づいている。[49]

一方、この公開の論理に基づく「年報」の作成は、今日の香港においては「善堂」の伝統に止まらない。香港の慈善団体の多くは、有限会社として政府の「公司註册處」(The Companies Registry)に登記しているため、会計報告を含む年次報告書をつくることは、ある程度、義務的なことになっている。全ページがカラーで写真も多い、装丁のきれいな華人慈善団体の「年報」は、上場会社や有限会社が対外的につくっている「年報」に限りなく近い。事実、「香港管理専業協會」(Hong Kong Management Association)は、一九七〇年代より毎年、前年度の各社の「年報」を審査して、出来栄えの優秀な「年報」に賞を与えるコンテスト(Best Annual Reports Awards)を主催しており、そこでは非営利・慈善目的の会社というカテゴリーがあって、慈善団体の年報も審査・受賞の対象とされている。

このように、慈善団体の「年報」は、人類学者や歴史学者にとって参照するに値する歴史資料である。そこに含まれている情報は私たちにとって有益なものであり、そして、「年報」自身が香港で送る社会生活もまた興味深いものである。

注

(1) 伊原弘「日常と非日常 —中国史のなかの庶民(九)—」『しにか』一九九四年一二月号、九〇—九五頁。

(2) 同論文、九四頁。

(3) Maurice Freedman, *Chinese Family and Marriage in Singapore*, London (Colonial Office, Colonial Research Studies,20), 1957. M・フリードマン(田村克己・瀬川昌久訳)『中国の宗族と社会』弘文堂、一九八七年、などを参照。

(4) 例えば、David Faure, *The Structure of Chinese Rural Society: Lineage and Village in the Eastern New Territories, Hong Kong,* Hong Kong: Oxford University Press, 1986., 蔡志祥〈走向田野的歴史学 －田野調査和地方史研究－〉《香港社會科學學報》第四期、一九九四年、二二二－二三五頁、などを参照。

(5) 可児弘明『近代中国の苦力と「豬花」』岩波書店、一九七九年。

(6) 同書、三五九－三六〇頁。

(7) 夫馬進「清代沿岸六省における善堂の普及情況」『富山大学人文学部紀要』第七号、一九八三年、一五－四五頁。

(8) 「善堂」との関係で、特に重要な著作として、William T. Rowe, *Hankow: Conflict and Community in a Chinese City, 1796-1895,* Stanford: Stanford University Press, 1989.がある。

(9) 例えば、小浜正子「民国期上海の民間慈善事業と国家権力」『東洋学報』第七六巻第一・二号、一九九四年、一－三六頁、帆刈浩之「清末上海四明公所の『運棺ネットワーク』の形成 －近代中国社会における同郷結合について－」『社会経済史学』第五九巻第六号、一九九四年、一－三二頁、など。

(10) 人類学者の注目を集めることはなかったが、現在の中国大陸において、香港同様、一九四九年の共産主義革命の影響を直接には受けなかった土地として、ポルトガル領のマカオがある。マカオにも歴史のある華人慈善団体が存在するが、それについては別稿を準備して論じる予定である。

(11) Henry Lethbridge, *Hong Kong: Stability and Change,* Hong Kong: Oxford University Press, 1978.; Carl T.Smith, *A Sense of History: Studies in the Social and Urban History of Hong Kong,* Hong Kong: Hong Kong Educational Publishing Co., 1995.などを参照。

(12) Elizabeth Sinn, *Power and Charity: the Early History of the Tung Wah Hospital, Hong Kong,* Hong Kong: Oxford University Press, 1989.

(13) ibid., pp.80-81.

(14) Lawrence W. Crissman, "The Segmentary Structure of Urban Overseas Chinese Communities" *Man (N.S.)* 2: 185-204, 1967.

(15) ibid., p.195.

(16) ibid., p.197.

(17) Sinn, op.cit., pp.32-37.

(18) ibid., pp.79-81.

(19) エリザベス・シンのモノグラフが「善堂」に触れていないという点に関係して生じる重要な問題として、慈善をめぐる宗教的な意味世界の問題がある。商人が紳士の生活スタイルに倣って慈善事業をするという儒教的な背景があると同時に（Sinn, op.cit., p.87）、道教的な背景も「善堂」にはあると考えられる。台湾では、「善堂」とは「扶鸞」という宗教儀式を行う場所や組織を言い（可児弘明「扶鸞雑記 －民衆道教の周辺（その一）－」『史学』第四五巻第一号、一九七二年、五七－八八頁、七九－八〇頁）、香港、さらには近代の珠江デルタでは、道教団体と慈善活動の結びつきが強い（志賀市子「香港の『道壇』 －近代民衆道教の一形態として－」『東方宗教』第八五号、一九九五年、一－二三頁、を参照）。

(20) Inland Revenue Department, Hong Kong, *Charitable Institutions and their Treatment under the Inland Revenue Ordinance, Estate Duty Ordinance, Stamp Duty Ordinance, Entertainments Tax Ordinance and Business Registration Ordinance,* September, 1992.

(21) ibid., p.2.

(22) ibid., p.6.
(23) 香港社會服務聯會《四〇周年紀念特刊》、一九八七年、一二頁。
(24) The Hong Kong Council of Social Service, *Annual Report 1993-94*, 1994, pp.97-106.
(25) 香港社會服務聯會、前掲書、二八－二九頁。
(26) *The Community Chest Annual Report 1994/95*, pp.43-46.
(27) 総理の出身地についての情報は、慈善団体の印刷物に載った総理の略歴から収集できる。この略歴の初めの方の項目には、たいていい「籍貫」（父祖の地）が挙げられているが、「籍貫」を明らかにする欄が設けられているということ自体が、全ての総理は中国にゆかりがあるという前提を示している。
(28) 東華三院《甲戌年年報》、一九九五年、一〇頁、参照。
(29) 一九六〇年代から七〇年代にかけての「香港公益金」の草創期に行政職で活躍したある人（中国人）は、インタビューの中で、「香港公益金」を広東語で「鬼佬嘅保良局」（西洋人の「保良局」）と表現していた。このことは、募金活動の統一という米国的な方法（The United Way）を採り、西洋系の大会社を寄付の与え手として擁している「香港公益金」の性格を表していると同時に、「西方（Western）／中國（Chinese）」という香港の人々の文化的説明におけるイディオムが、慈善団体の分類においても使われるということを示唆している。ところで、香港の慈善活動に対して歴史を通じて重要な役割を果たしてきた西洋起源の団体としては、「英皇御准香港賽馬會」（The Royal Hong Kong Jockey Club）に触れる必要がある。今日この団体が競馬や宝くじ（「六合彩」）の収益を慈善事業に回すために持っている付属機関としては、一九九三年六月設立の「香港賽馬會慈善信託基金」（The Hong Kong Jockey Club Charities Trust）があり、「東華三院」もここからの寄付を受けている（*The Royal Hong Kong Jockey Club Annual report & accounts 1993/94*, pp.53-59.）。
(30) *Hospital Authority Annual Report 1993-1994*, pp.94-169.
(31) 《博愛醫院董事局年報暨壬申癸酉年總理交代就職典禮》、一九九三年、八四頁、などを参照。
(32) 《國際潮訊》（香港潮州商會）、第一七期、一九九三年、四七－四九頁。
(33) 《香港東華三院百年史略》（上册）、一九七〇年、九〇－一〇四頁。
(34) 東華三院、前掲書、一九九五年、四三頁。
(35) 同書、一一四頁。
(36) 同書、一一四－一一六頁。
(37) 前掲、《香港東華三院百年史略》（上册）、一九七〇年、九三頁。
(38) 保良局《甲戌年年刊》、一九九五年、九一－九三、一二六－一二九頁。
(39) 九龍樂善堂《樂善堂百年史實》、一九八一年、六六－六九頁。
(40) 《九龍樂善堂一九九四年度年刊暨一九九五年度總理就職典禮特輯》、一九九五年、一四三、二一二－二一三、二二八－二三八頁。
(41) 《博愛醫院七十五周年鑽禧特刊》、一九九五年、四四頁。
(42) 《博愛醫院董事局年報暨甲戌乙亥年總理交代就職典禮》、一九九五年、六六頁。
(43) 《仁濟醫院開幕特刊》、一九七三年一〇月二四日、参照。
(44) 《仁濟醫院第二七屆董事局年報》、一九九五年、一八五－一八六頁。
(45) 《一九九五年仁愛慈善餐舞會》、一九九五年三月二二日、二三頁。
(46) 《仁愛堂第十六屆（乙亥年）董事局就職典禮特刊暨甲戌年董事局年報》、一九九五年、六四頁。
(47) 筆者の「仁濟醫院」でのインタビューによる。
(48) 前掲、《仁愛堂第十六屆（乙亥年）董事局就職典禮特刊暨甲戌年董

事局年報》、一九九五年、七六頁。

(49) 夫馬進「『徴信録』というもの」『中国 —社会と文化—』(東大中国学会) 第五号、一九九〇年、五九—七四頁、参照。

付記

本稿のもとになる調査は、文部省アジア諸国等派遣留学生として香港中文大学に在籍した一九九三年九月から一九九五年八月の間に行った。また一九九三年の調査開始時には、財団法人民族学振興会より渋沢研究助成金の助成をいただいた。

Chinese Charitable Organizations in Hong Kong Today: An Example of Cooperation between Anthropology and History

Satohiro SERIZAWA

Recently, many researches of Chinese history are done on the field of charitable activities in the Chinese society. This article is the attempt for an anthropological approarch to this field: the description of the Chinese charitable organizations in the contemporary Hong Kong by focusing on the social and cultural situations around them and their historical backgrounds.

In today's Hong Kong, we can distinguish the Chinese charitable organization from the Western one in terms of the service and the way of management. The six organizations described in this article are influential and prestigious within the community. People know them well through their services and fund raising activities. And the government has been playing an important role in the process of their historical development. Further, through negotiation with the government, Chinese charitable organizations may be reorganized and change their "tradition". The Chinese charitable organization has been working as one of the important social institutions for Hong Kong residents for a long time and providing interesting materials for anthropological and historical researches.

Key Words

anthropology, history, charitable organization, Chinese society, Hong Kong